

研究者総覧：山口 庸子 (YAMAGUCHI, Yoko)

氏名	山口 庸子 (YAMAGUCHI, Yoko)	
職名	准教授	
所属講座	国際多元文化専攻先端文化論講座	
学位（専攻分野）	博士（学術）・名古屋大学	
メールアドレス	k46439a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp	
個人のホームページ	http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/staff/yamaguchi.html	
研究分野	身体文化史	
	西洋舞踊史	
	ドイツ文学	
現在の研究テーマ	モダニズムにおける人形的身体	
所属学会	日本独文学会	
	ドイツ学会	
	舞踊学会	
主要著書・論文	Brief als Medium der Transformation. Else Lasker-Schülers „Briefe nach Norwegen“. In: Yamamoto, Hiroshi/Ivanovic Christine (Hrsg.): Übersetzung – Transformation. Umformungsprozesse in/von Texten, Medien, Kulturen. (Königshausen & Neumann) 2010, 180-187.	
	「表現舞踊と精神医学——メアリー・ヴィグマンとハンス・プリンツホルン」『日本病跡学会雑誌』No.79, 2010, 62-69.	
	Grace of Movement: An Aspect of the Body Aesthetic in German Body Culture. In: Viewing Bodies, Reading Desire, Conceptualizing Families. Proceedings of the International Conference “Thinking Gender in Culture”, 2009, 32-39.	
	「聖なる踊り子——シャルロッテ・バラの舞踊美学における宗教性」『言語文化論集』第XXX巻 第2号 2009, 277-291.	
	『踊る身体の詩学——モデルネの舞踊表象』名古屋大学出版会, 2006	
自己紹介文	<p>外国語に対する漠然とした憧れがあり、詩を読んだり書いたりするのも好きだったので、大学に入る頃には、外国詩の研究者になりたいと思っていました。学部の1年生で、ホロコーストを生きのびたパウル・ツェランの詩を読んで衝撃を受け、ドイツ文学を専攻することにしました。その後、ベルリン自由大学に留学したとき、モダニズムの文学作品に出てくる舞踊イメージに興味を持ち、その時代背景を調べているうちに、こんどは社会のなかで</p>	

舞踊や身体文化が果たす役割について考えはじめて、現在に至っています。2006年に出版した『踊る身体
の詩学』（名古屋大学出版会）は、
ドイツ留学以降に取り組んできた、
舞踊と文学の相互的関係について
の研究をまとめたものです。哲学者
のニーチェや、詩人のリルケ、舞踊
家のヴィグマンらのテキストを分
析し、ドイツ語圏モダニズムにおい
て、舞踊が持ちえた歴史的・社会的
・文化的意味を検証しました。現在
では、研究対象を、舞踊から身体
文化の様々な領域に広げつつあります。最近では、最初の近代的
な女子体操であるメンゼンディーク体操の美学的・社会的意義、
表現舞踊家シャルロッテ・バラの宗教性、近代の輪舞表象の日独
比較、ドイツ語圏の表現舞踊と精神医学の関連、などをテーマに
論文の執筆や発表を行っています。また、同じ時代に見られる人
形的な身体について、演劇や舞踊、人形劇など、学際的な視点から
研究を進めています。



著書『踊る身体 of 詩学』の
表紙

受験生へのメッセージ

私はもともと踊りを習っていたわけではなく、舞踊や身体文化に興味を持ち始めたのはほんの偶然でした。モダニズムの詩人の作品に、踊りのイメージがひんぱんに登場することに気がついて、「どうしてなのだろう？」と素朴な疑問を抱いたのです。当時は、文学研究の立場から舞踊にアプローチするという学際的な研究はまだ始まったばかりで、日本に帰って来ても、自分の研究テーマを説明するのに苦労しました。ドイツでも、舞踊や身体文化の一次資料はほとんど整備されておらず、何もかも手探りでしたが、その分、新しい視点やテーマを発見する喜びは大きかったように思います。



世界的な舞踊研究者 スーザン・マニング教授講演会のポスター

学問の方法にもいろんなスタイルがありますが、私は小さくて素朴であっても、何か具体的な手ざわりのある問題から出発して、試行錯誤しながら新しいものを発見していくというやり方を取っています。また、そうして見出された新しいものは、ほんのかすかにでも、何かの形で社会や人間の役に立つべきで、博士論文も、そのようなものでなければならないと考えています。講演会などの催しも、同じ思いで企画しています。学問には、知識や論理が大切ですが、一方で、人間とはいったい何か、という根本的な問いを、常に心のどこかに持っているような受験生を歓迎します。